

大阪大学 図書館報

Vol.38 No. 2 (2004 年 9 月)

目次

二つの大学図書館	1
図書館用 RFID システムの展望	3
教員著作寄贈図書	5
お知らせ	6
会議・日誌	7

二つの大学図書館

天野 文雄

ちょうど 17 年前の秋、信州の短期大学から大阪大学の文学部に赴任した筆者は、まさききに附属図書館に足をはこんだ記憶がある。当時の図書館はもちろん現在の図書館ではなく、新館増築以前の現在の B 棟を中心とした時代の図書館であった。カウンターで国立大学の図書館ならどこでも入館できますという小型の入館証を発行してもらったあと、はじめての館内をためつすがめつするのを見てまわり、閲覧室から書庫に入って、書架が左右に林立する長い通路に立ったとき、不

意に、新しい職場に来たのだという感慨と、ここがこれから自分が勉強してゆく場所なのだという思いがわいてきた。

どちらかといえば晩学の部類に入る筆者は、20 代の前半までは図書館はそう深い縁がある場所ではなかった。それが一念発起して、日本の古典文学を学ぼうと、25 歳で国学院の文学部の 2 部に学士入学してからは状況が一変した。明治初年設立の皇典講究所を母体とする国学院は日本文学や日本史の分野で豊かな伝統を持つ大学であるが、貴重な古典籍を

数多く所蔵する図書館も、小規模ながらよく整備されていた。そこで筆者ははじめて大学の図書館というものに出会い、たちまちその環境になじんで、さらに基本的な勉強のしかたをそこで学んだのである。

もっとも、勉強のしかたといっても、筆者の場合、とくに変わったことをしたわけではない。要するにそれはカードを繰り、直接書架の書籍を探索するというごくあたりまえの利用のしかただったのであるが、そうした作業のなかで、想定していたことがみごとに外れたり、あるいは思いもかけない発見があったりして、筆者は知らず知らずのうちに「研究」というものの面白さにひかれていったのである。また、国学院の図書館では、筆者はたしか5, 6階建てだった書庫が気に入っていた。そこは当時は学部生は入ることができず、院生になってようやく入ることができる一種特権的な場所だったから、大学院に進んでは、書庫は思う存分利用した。書庫には書架のあいだに座り心地のよい木製のキャレルがいくつもあって、かたわらの小窓からは東京の夜景がみえたりした。そこではキャレルもよく利用したが、当時はそれ以上に書庫のなかを歩くことが好きで、これという目的もなくよく歩きまわっては、まったく専門外の本のあとがきを立ち読みしたりしていたように思う。そのうちに、手にとってみたことはなくても、あそこにはあの分野の本があるとか、あの本の背文字はこんな感じだ、というように、書庫の全体がなんとなく頭に入ってきた。そうしたイメージは、ある問題でなにを調べたらよいかというときにたいへん役立ったように思う。

以上はもう30年ほど昔の体験だが、この17年間の筆者の大阪大学附属図書館の利用のしかたも、じつはこれと同じであった。筆者はそこでも書庫や開架書架のあいだを歩きまわり、漫然と背文字をながめたり、新しい論文の想をねったりしてきたのだが、それ

がこの4月に思いがけず附属図書館の副館長を拝命してからは、長年にわたる自分流のスタイルを再検討せざるをえない状況に立ちいたったのである。

いうまでもなく、それはこの5,6年来、急速に進展した図書館の電子化にかかわることである。それまでの一利用者としての筆者は、右に述べたその利用のしかたからも明らかのように、図書館の電子化ということにはまったく無関心で無知だったのだが、着任してみると、大学図書館には電子化という大波が押し寄せていて、その図書館としてのあり方が急速に変わりつつある状況下にあった。一言でいうと、それは主として電子ジャーナルとデータベースの普及と導入によって生まれた状況である。21世紀という時代の大学においては、電子ジャーナルもデータベースも研究と教育には不可欠の媒体であることはいうまでもない。そうした認識のもと、ここ数年、大学図書館は急速度でいわゆる電子化を推進させてきたのであるが、それを推進させてゆくと、利用者はとくに図書館に足をはこばなくても文献の検索が可能となるわけで、そこには伝統的な図書館機能とのバランスということとともに、さらに図書館というものの存在意義が問われるというジレンマも生まれてきたのである。しかも、電子ジャーナルにしてもデータベースにしても、その利用経費は年々増大しつつあり、その経費をどのような形で負担するかが、法人化後の国立大学図書館運営における最大の問題となりつつある。

そもそも、現代のいわゆるIT化時代においては、筆者は「非時代」的な人間である。「非時代」というと仰々しいが、要するにパソコンもケータイも使わず(使えず)論文はワープロで書き、用事は電話やファックスで十分だと思っている人間である。したがって、論文の検索でもパソコンは利用せず、もっぱら経験とカンにたよっている。それでもいちおう研究の第一線にとどまっていられるのは、

ひとえに筆者が専門とする能楽研究の電子化の遅れに助けられているからである。もう 10 年ちかくも以前のことだが、江戸時代初期の金閣寺の僧の日記である『隔 記』から能数奇(のうずき)の京都の商人を検索したとき、手作業では 10 例くらいしか探しだせなかったのが、ある研究グループによって作成されていたデータベースで検索してもらったところ、事例は一挙に 3 倍になるという体験もしている。にもかかわらず、今日まで結果的に「非時代」的姿勢を変えることがなかったのは、不遜ながら、あと 20 年でいどの研究生生活なら、なんとか乗り切れるという目算もあったからである。しかし、それはあくまでも個人的な「趣味」であり、附属図書館の副館長という立場で主張できることではもちろんない。

現在、社会のあらゆる領域がそうであるように、大学図書館もまた大きな転換期にあることは疑いがなく、それは従来の文献資料の集積の場としての図書館に加えて、あらたに電子化された資料の提供の場としての図書館が出現したということであるが、ことはそのどちらを優先させればよいか、というような二者択一的な問題ではあるまい。平凡なようだが、大学図書館が進むべき道は、これまで筆者が実践してきたような手作業的な場と、時代の要請である電子化資料集積の場という、新旧二つの機能をあわせもった新しい図書館の実現以外にはないのではないだろうか。それにしても、このような転換期に、筆者のような非時代的な人間が副館長に任命されるというのは、どう考えても運命のいたずらとしか思えないのだが。

(あまの・ふみお 副図書館長、文学研究科教授)

図書館用 RFID システムの展望

塩見 英久

はじめに

限られた職員で多様なサービスを提供し利便性を高めるため、現代の図書館業務は高度に情報化され様々な仕事が計算機によって自動的に処理されています。書籍に張り付けられた O C R タグや利用者票に張り付けられた磁気テープに記録された情報を計算機に読み取らせる事で様々な仕事が自動的に処理されてゆきます。しかし O C R や磁気テープは情報の読み取り作業に手間がかかります。例えば、大量に積み重ねられた書籍の山の情報を読み取るには、書籍を一冊ずつ取り出してはタグの場所を確認し読み取り装置にかけ... 大変な作業が必要です。もし、このような作業をボタン一つで終了できれば... このような要求を実現するのが RFID システムです。

RFID システム

RFID システムは、磁気カードや O C R に代わる新しい自動認識技術で、無線周波数(Radio Frequency)の電波によって記憶機能を備えた IC タグの情報を読み書きするものです。従来技術と比較すると、1)遠隔読み書き機能、2)セキュリティ機能、3)大容量読み書き記憶、といった特徴があります。電波を使うので、複数のタグの情報を瞬時に読み取ったり、タグ自身が書籍の裏に隠れていても情報を読み書きしたりできます。また、IC タグは読み書き装置から送られる電波を自身の電源として用いるので半永久的に使用できます。IC タグに記憶された情報を読み出すためには決められた手順やパスワードが必要なので偽造や不正読み出し/書き込みに対する耐性が強く、保護が必要な個人情報など

を格納する用途にも適しています。比較的大容量の情報を読み書き記憶できるので、恒常的に変化しない書籍情報を書き込んでおくだけでなく、貸出履歴や配架情報など時々刻々と変化する情報を記憶させることもできます。

このような特徴を利用して物流業界を中心に盛んに応用され始めています。代表的な例では、すでに広く馴染みのある ICOCA や PITAPA など交通機関向けの非接触 IC カード、高級品店や CD 店などの盗難防止ゲート、edy などの電子マネーカードや、配送業の貨物仕訳作業の自動化や生鮮食品の生産地証明、スーパーマーケットの自動清算ゲート、イベントの電子チケットなどが挙げられ、非常に多種多様な分野で応用が開始 / 検討されています。

図書館における RFID システムの展望

いくつかのメーカーが蔵書管理用 RFID システムを製造しており、全国の図書館への導入も徐々に進んでいます。システムの導入により、書籍の貸出や返却仕訳、蔵書管理の自動化など業務の省力化が期待されています。将来はインテリジェント書架の導入や全自動の貸出システムなどへの発展が考えられます。

インテリジェント書架とは、RFID システムの読取書込機を内蔵して書籍の位置検索機能を付加した書架です。例えば、利用者が検索した書籍が現在貸出中かどうかの確認のみならず、現在閲覧中や仕訳中かどうか、書架に収納されていれば館内のどの書架に収納されているか検索できます。さらに、書架に内蔵されたランプの点滅で検索された書籍がどの棚の何列目付近に収納されているかを知らせることまでできます。

全自動貸出システムは、まったく人手をかけずに貸出 返却 仕訳処理までをおこなうシステムです。まず、利用者が書籍を図書館外に持ち出すだけで貸出処理します。返却時に返却台

に書籍を置くとベルトコンベアで運搬する間に返却処理し、収納する書架毎に仕訳します。もし、利用者が誤った場所に収納した場合、書籍の再配架リストに登録し、書架を整理する際に、インテリジェント書架が配架元と配架先をランプで知らせてくれるなど手伝ってくれます。閉架の場合でしたら、書籍の収納までをも完全自動化したシステムが実現可能でしょう。

図書館用 RFID システムの課題

図書館用 RFID システムの技術的課題は、1) 読取可能範囲の拡大、2) 複数タグ識別能力の高精度化が挙げられます。現在広く利用されている RFID タグの多くは、読取可能範囲が 20cm 未満の 13.5MHz 帯の電波を利用していますが、書籍などで利用するには少々読取範囲が狭いのが難点です。最近では、読取範囲が数メートルで図書館に適した 2.45GHz 帯の電波を利用する次世代 RFID の研究が活発化しています。

また、近接した複数のタグから到来する電波を各々識別するための技術が提案されています。私達の研究室では、これらの技術的課題を解決するために 2.45GHz 帯 RFID の模擬システムを構築し、書籍張付に最適な RFID タグ用アンテナや高精度な複数タグ識別のための適応アンテナ技術の研究を進めています。

まとめ

RFID システムは書籍と計算機を結び付け、図書館の利便性を飛躍的に高めることができる技術です。RFID タグの真の利点を発揮できる次世代タグの研究はまだ始まったばかりですが、周辺技術の目覚ましい発展により、研究がどんどん加速されることが予想されます。技術的課題に留まることなく、将来の図書館における RFID のあるべき姿も含め、さらに研究を進めたいと考えています。

(しおみ・ひでひさ 図書館研究開発室員 基礎工学研究科助手)

教員著作寄贈図書

(2004.6 ~ 2004.8)

本館	
言語文化部・大学院言語文化研究科	自然言語への理詰りのアプローチ / 大阪大学言語文化部, 大阪大学大学院言語文化研究科編 (言語文化共同研究プロジェクト ; 2003) [豊中] : 大阪大学言語文化部 : 大阪大学大学院言語文化研究科, 2004 ほか13冊
天野 文雄 (文 教授)	The Noh Ominameshi : a flower viewed from many directions / edited by Mae J. Smethurst ; co-edited by Christina Laffin (Cornell East Asia series ; 118) Ithaca, N.Y. : East Asia Program, Cornell University, 2003
大学院人間科学研究科 教育技術開発学研究室	大学生にとって、いま「大学」とは? : 「大学生の生活意識に関する調査」報告書 / 大阪大学・大学院人間科学研究科・教育技術開発学研究室編 [吹田] : [大阪大学・大学院人間科学研究科・教育技術開発学研究室], 2004
池谷 元同 (名誉教授)	Earthquakes and animals : from folk legends to science / Motoji Ikeya Singapore : World Scientific, 2004
徂徠 道夫 (名誉教授)	Comprehensive handbook of calorimetry and thermal analysis / Michio Sorai, editor-in-chief, The Japan Society of Calorimetry and Thermal Analysis Chichester, West Sussex : J. Wiley, 2004
生命科学分館	
山本 容正 (医 教授)	Helicobacter pylori infection and immunity / edited by Yoshimasa Yamamoto, Herman Friedman and Paul S. Hoffman. (Infectious agents and pathogenesis) New York : Kluwer Academic/Plenum, 2002
中村 仁信 (医 教授)	IVR の臨床と被爆防護 / 中村仁信, 富樫厚彦, 諸澄邦彦編著 東京 : 医療科学社, 2004
吹田分館	
塩澤 俊之 (名誉教授)	Classical relativistic electrodynamics : theory of light emission and application to free electron lasers / Toshiyuki Shiozawa Berlin ; Tokyo : Springer, c2004
湯浅 邦弘 (文 教授)	体験懐徳堂 / 湯浅邦弘編 CD-ROM 豊中 : 大阪大学大学院文学研究科, 2004
濱 恵介 (工 客員教授)	わか家をエコ住宅に : 環境に配慮した住宅改修と暮らし / 濱恵介著 京都 : 学芸出版社, 2002
澁谷 陽二 (工 教授)	IUTAM Symposium on Mesoscopic Dynamics of Fracture Process and Materials Strength : proceedings of the IUTAM symposium held in Osaka, Japan, 6-11 July 2003 / edited by H. Kitagawa and Y. Shibutani Dordrecht : Kluwer Academic Publishers, c2004
加藤 直三 (工 教授)	Bio-mechanisms of swimming and flying / N. Kato, J. Ayers, H. Morikawa(eds.) Tokyo : Springer, c2004

人間科学研究科図書室	
大坊 郁夫 (人 教授)	被服と化粧の社会心理学：人はなぜ装うのか / 大坊郁夫, 神山進編集 京都：北大路書房, 1996
井上 光洋 (人 教授)	いま問い直す斉藤喜博の授業論：教授種別の選択系列のアセスメントによる授業分析の方法 / 井上光洋著；北川金秀編 [東京]：一莖書房, 2004
薬学部図書室	
北 泰行 (薬 教授)	創薬化学：有機合成からのアプローチ / 北泰行, 平岡哲夫編 東京：東京化学同人, 2004
微生物病研究所図書室	
高橋 理明 (名誉教授)	ワクチン今昔物語 / 高橋理明著 (未来の生物科学シリーズ / 大島泰郎 [ほか] 編集；20) 東京：共立出版, 1989

(敬称略：受付順)

お知らせ

複写サービスの改善について

- ・本館、生命科学分館、吹田分館では利用者の所属部局をとわず他キャンパス、他大学への文献複写依頼を受け付けます。
- ・本館、生命科学分館内に所蔵する資料の

文献複写については、文献画像伝送システムを利用することが可能です。

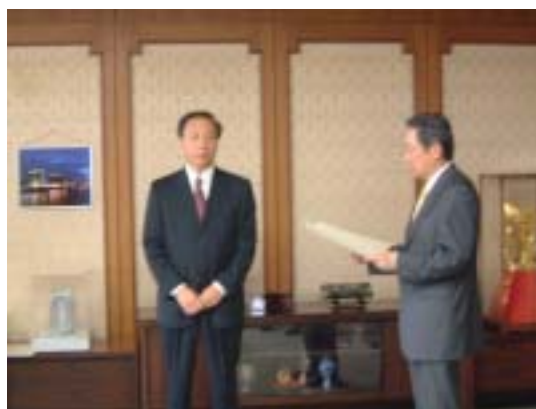
ご利用については、受付窓口にご相談下さい。

中国教育部から大阪大学に図書贈呈

中華人民共和国教育部から大阪大学に1,096冊の中国図書が寄贈され、去る6月23日(水)に大阪大学総長室において目録の贈呈式が催されました。趙沁平(Zhao Qinqing)中国教育部副部長(学術研究担当)から宮原総長に寄贈図書の目録が贈呈され、同総長から趙副部長に感謝状と記念品が贈られました。図書館からは天野副図書館長と伊藤事務部長が同席しました。寄贈された図書は、全分野にわたる新刊本で中国の現状を知るには最適の資料となっています。

本学には約1,050名の外国人留学生が在籍しており、そのうち約370名が中国からの留学生となっております。中国語を学習する学生とともに大いにこの資料を活用して中国の事情を把握していただければ幸いです。なお、

同資料は、本館B棟3階階段横にまとめて別置してありますのでどうぞご利用ください。(順次整理して書架に並べています。蔵書検索の所在場所は本館B棟3階(中国)と表示されます。)



贈呈式(宮原総長(右)と趙副部長(左))

第51回国立大学図書館協会総会

去る7月1日(木)に、近畿地区国立大学図書館協会の担当で大阪大学附属図書館を当番館として、標記総会が開催されました。国立大学図書館協会は全国の国立大学附属図書館等の機関が加入して共通の課題を解決するために様々な活動を行っている任意団体です。吹田キャンパスの大阪大学コンベンションセンターを会場として92機関から約250名の図書館長、管理職の方々がこの総会に参加しました。

午前中には、本年度の国立大学図書館協会の事業計画や予算案の審議、文部科学省三浦情報課長による所管事項説明が行われ、昼の新理事会をはさんで午後には3つの大きなテーマによるワークショップが開催され、その後の全体会議でまとめが行われました。

国立大学が法人化されてから最初であり、ま

た昨年度までの国立大学図書館協議会をスリム化(理事館を減らし、総会日程を2日から1日に短縮)して初めての総会でしたが、近畿地区各国立大学附属図書館職員の応援も得て成功裏に開催することができました。関係者の皆様にはお礼を申し上げます。



総会会場の様子

本館で書庫資料の整理作業を行います。

本館では今秋から、書庫の一部(主に5階)の移動作業および未入力図書の目録データ化を行います。職員の出入りやエレベーターの

使用により利用者の皆様にご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いします。

会 議

第1回大阪大学デジタルコンテンツ委員会 6.17(木)15:00~15:40

1. デジタルコンテンツ委員会の審議事項について、検討された
2. デジタルコンテンツ委員会規程第3条第1項第6号委員(デジタルコンテンツ作成に係る部局の教員若干名)及び第7号委員(その他委員会が必要と認めた者)の選出について、審議された。

第2回附属図書館電子図書館専門委員会 6.28(木)10:00~11:20

1. データベース検索システムの課金方式について、協議の結果、当面は現状どおりとすることになった。
2. データベースの利用拡大方策について、学生への開放などの方策について検討された。

図書館委員会 7.6(火)13:00~14:10

1. 平成16年度予算配分案が承認された。
2. 附属図書館評価委員会内規及び附属図書館施設委員会内規が制定された。

附属図書館豊中地区運営委員会 7.20(火) 10:30~12:15

1. コモンルームの設置について、審議された。
2. 図書の不用品決定の手順について、原案のとおり承認された。

生命科学分館運営委員会 7.23(金) 16:00~17:30

1. 平成17年度生命科学分館購入雑誌および電子ジャーナル等の購入について検討、協議した。
2. 平成16年度生命科学分館備付学生図書及び視聴覚資料の選定について、原案通り了承された。
3. 平成16年度製本費の予算配分について、原案通り了承された。
4. 生命科学分館資料の不用品決定基準について、原案通り了承された。
5. 生命科学分館の委員会のあり方について、協議し、現状通りとすることになった。

分館長会議 7.27(火) 10:00~11:30

附属図書館評価委員会 7.27(火) 11:30~12:20

平成16年度の評価について、検討された。

吹田地区運営委員会 8.4(水) 15:00~16:30

1. 平成16年度吹田分館図書資料費等予算執行計画について協議した。
2. 吹田分館における図書不用品決定基準の作成について協議した。
3. 吹田分館備付資料購入費部局分担比率の見直しについて協議した。
4. 吹田分館諸規定の改訂について協議した。

日誌

H16. 6.11	第73回近畿地区国立大学図書館協議会	(国際日本文化センター)
6.17	第1回大阪大学デジタルコンテンツ委員会	(生命科学分館)
6.28	第2回附属図書館電子図書館専門委員会	(本館)
7. 1	第51回国立大学図書館協会総会	(コンベンションセンター)
7. 6	図書館委員会	(本館)
7.20	附属図書館豊中地区運営委員会	(本館)
7.23	生命科学分館運営委員会	(生命科学分館)
7.27	附属図書館評価委員会	(生命科学分館)
7.27	分館長会議	(生命科学分館)
8. 4	吹田地区運営委員会	(吹田分館)

大阪大学図書館報 Vol.38 No.2 通巻 151号 2004年9月30日発行
発行 大阪大学附属図書館 〒560-0043 豊中市待兼山町1の4 06(6850)5070
e-mail : sanko-honkan@library.osaka-u.ac.jp